鷺浦地区の歴史

古代から人々は鷺浦で生活してきた。鷺浦が現れる最初の文献は、「出雲国風土記」という地域の言い伝えを 733 年に編纂したものだ。そこにはこの地域は「鷺浜」として登場する。稲奈西波岐神社について、神話を 720 年に編纂した「日本書紀」に記載がある。

江戸時代（1603 年 - 1867 年）中期までに、交易船が京都や大阪から日本海を航海し、定期的に訪れるようになった。港のお陰で鷺浦は栄え、交易関係、宿泊施設が揃った、風向きが好ましくなるまで待つために安全に錨を港に降ろせる場所であった。また、地元の卸売業者は国内の遠隔地からの荷物の配送を管理していた。しわく屋は、かつては倉庫で今は一般公開されているが、瀬戸内海の塩飽諸島産の塩を運んで富を築いた。

明治時代（1868 年 - 1912 年）と大正時代（1912 年 - 1926 年）の間もまだ、鷺浦は大阪の商業船が定期的に訪れる寄航港だった。町が最も栄えていた 1888 年頃には、ひとつの船会社が一年あたり 100 隻を超える船を管理していたと推定されている。

急速な近代化と天然資源の需要から、鉱業という産業がこの地域に加わった。1920 年代後半までに、銅山は閉鎖され国鉄が敷設されたため、海上輸送は激減し、鷺浦の商業的な繁栄は終わった。現在、漁業が主要産業となっている。